慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	プルーストの「黒」のイメージ
Sub Title	
Author	櫻木, 泰行(Sakuragi, Yasuyuki)
Publisher	慶應義塾大学法学部
Publication year	1983
Jtitle	慶應義塾創立一二五周年記念論文集 : 法学部一般教養関係 (1983. 10) ,p.105- 123
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=BN01735019-00000003-0105

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

プルーストの「黒」のイメージ

櫻木泰行

プルースト Marcel PROUST（1871～1922）の色彩光学を明らかにする試みとして、かつてこの小説家の表色語の使用頻度を調査し、その資料にもとづいて「モーヴ色」と「青」のイメージを考察したことがある。[1] 今回は同じ試みの一環として「黒」のイメージの用例を資料として提出することにしたい。

プルーストが生涯をかけて書き残した唯一の長編小説『失われた時を求めて』A la recherche du temps perdu（1913～1927）は、プレーヤード版で三巻、合計三一一六ページ、邦訳では筑摩世界文学大系・三巻五冊（既刊四冊）の分量になる。この小説作品の色彩語については、一九七六年にアラン・H・パスコが "The Color-keys to《A la recherche du temps perdu》" と題する注目すべき一書を刊行した。[2] 著者はプルーストの全表色語を Pink, Red, Blue, Mauve-Violet, Yellow, Brown, Orange, Green, Black-Gray, White の十種の range に分類し、各系列について、主として色彩学で「色の連想」color association といわれる現象の側面から特徴的な用例を考察し、プルーストが色彩をどのような観念やヴィジョンと結びつけているかを指摘している。ただし、著者が明らかにする特徴は、選択・引用される用例の性格、種類、数などに依存しているため、多少とも主観的、任意的性格をおびざるをえないし、また、色彩の分類法にも異論の余地がなくはない。しかし使用頻度などの統計的資料は正確

で信頼できる。その資料によれば、『失われた時』の色彩語頻度は合計二四三〇例である。このうち、1位は黄色系三九四（金色、二三五、ブロンド八四、黄色七〇、その他五）、2位、赤色系三七八、3位、白色系三七一、4位、黒、灰色系三五五（黒二五九、灰色九三、その他三）、5位、青色系三一七、6位、ピンク系二八六（ばら色二六八、その他一八）、7位、緑色系一二二、8位、モーヴ、ヴァイオレット系一〇八、9位、茶色系八一、10位、オレンジ系一八の順である。

赤、白が上位を占める点は多くの作家に共通する。黄金色が多いことは、太陽讃歌の子であるプルーストの昼光の詩学を象徴するものであり、フランソワ・ダヴィーは金色（or, doré, etc.）の用例二一一例を集め、若干の注解と考察を加えて『プルーストの黄金』と題する一冊の興味深い書物を刊行したほどである。[3]

プルーストにあって金色と同じくらい重要なのは青であるが、黒もまたそれに劣らない。黒の詩人ともいわれるボードレールの『悪の華』は、黒七七、白二七、青二〇、赤一七と、さすがに黒が多い。[4] 黒が一位を占めるのは、フローベールの『ボヴァリー夫人』も同じである。

先にあげたパスコは、プルーストの黒と灰色を同系色として一つの章で扱い、その章を“Black-Gray or Death and Resurrection”と題している。彼によれば、プルーストの黒は人間の肉体の死ばかりでなく、愛の死や夢の死、また種々の破壊に結びつけられ、一方、小説の主人公である話者の祖母はその死後、灰色とともに復活する。[5]

色の連想、象徴性などの観点からみて、一般に黒はどういう色であろうか。塚田敢『色彩の美学』によれば、「黒は闇の色であって、不吉さや悪を意味し、沈黙や地獄を表わす。黒を喪の色とするのはわが国だけでなく、イラクやスイスなど洋の東西を問わず多い。タイでも以前は白が喪の色であったが、最近は黒に代わった。わが国でも「腹黒い」といった言葉があり、また西洋でも「ブラック・リスト」などというように、黒は悪のシンボルに用

いられている」。中世のキリスト教会堂の色のシンボルという点からすれば、「黒は伝統的な喪の色であって、受苦日（Good Friday）に対する礼拝の色とされた」のであり、「黒は死の悲しみと墓の暗さを象徴している」という。[6] 赤池鉄士『英語色彩の文化誌』でも「黒は夜の色であり、罪悪や犯罪の色でもある。また、黒は不吉、悲哀、絶望、恐怖、沈黙、死、地獄、敗北、妨害、不気嫌、程度などを表わし、日本、イラン、イラクをはじめ多くの国の喪色である」と記されている。[7]

フランス語で「黒」を表わすのは形容詞または名詞の noir である。他に noirâtre（黒味をおびた）、noirceur（黒さ）と動詞の noircir がある。Paul Robert の仏語辞典ではこれらの全体に大版約2ページ半を当てている。形容詞の noir の一般の意味は「黒い」のほかに、「黒人の」、「よごれた」、「暗い」があり、精神的意味として「陰うつな」、「悪意のある」、「悪い（非合法の）」などがある。名詞では「喪」の意味にもなり、憂うつや悲観を象徴する色でもある。ロベール・ラフォン社の『象徴辞典』の noir の項では、心理分析的観点からの黒の意味が注意をひく。黒はすべての色、光の不在とみなされるところから、「カオス、虚無、夜空、夜の地の闇、悪、不安、悲しみ、無意識、死」を喚起する色であるが、また聖書の「一粒の麦」を受けて育てる「肥沃な大地」の色であり、「この大地は墓を含むため、死者の滞在する場所となり、死者の再生を準備する」そのような大地の色でもある。[8]

プルーストの黒は、しかし必ずしも以上のような一般的な意味やイメージをおびて用いられるとはかぎらない。プルーストが色彩を用いるのは何よりも、彼にとって何らかの価値をもっていた、またもっている存在を、彼の文学的空間を構築するための貴重なマチエールとして新たに価値づけるためである。その過程で、同時的に、そこに色彩調和や色彩対比の絵画的効果、あるいは象徴的、心理的効果が意識、計算され、あるいは夢想的な価値づけがおこなわれるのだといえよう。

小説家のむしろ無意識的なレベルの執着を示すとみられる彩色（＝価値づけ）としては、黒を女性の髪の色に使った例が黒の使用例のなかでもっとも多く、二一例ある点が注目されよう。話者の母の髪（例46）、ラシェルの髪（例59）、アルベルチーヌ（例88、92、96、etc 合計一四例）、アンドレ（例97）、その他、エルスチール夫人、パルム大公夫人も黒髪である。習作小説『ジャン・サントゥイユ』の主人公ジャンの髪がブロンドであったのにたいし、『失われた時』の話者自身もまた黒髪である（Ⅲ，1039）。ここにはプルーストの小説美学とともに彼の黒髪にたいする一種のオブセッションを見ることができるだろう。

一九〇五年九月二十六日に最愛の母を失ったプルーストは、翌二十七日にノアイユ夫人に宛てた手紙で、母は五十六歳で亡くなったが、病気になって痩せ細ってからは三十歳くらいの若さに見え、「お母さんは白髪は一本もありませんでした」と記している。[9] おそらく母のその黒い髪は、父（＝夫）を失ったあとの母の黒い喪服とともに、やがてプルーストにとって深い象徴性をおびて彼の小説のなかで変奏されるのである。

プルーストの黒の全用例を一望するためには引用は非常に短かいほうがよい。しかし用法の特徴をうかがうためにはある程度の文脈がほしい。この矛盾に立ってどの部分で切り取るかは、つづれ織を思わせる重層的なプルーストのテクストの場合、予想以上に困難であった。紙数の都合で二五九例すべてを提示することができないので、全三巻のうち、約三分の一に相当する第一巻の用例（九九例）のみここにあげたい。これだけの量でも、プルーストの「黒」の特徴は充分に想像することが可能である。

【用例】

『失われた時を求めて』 A LA RECHERCHE DU TEMPS PERDU[19]

I

「スワン家のほうへ」Du côté de chez Swann

1 （話者「私」の幼少年期の田舎町コンブレー）そこに住むには、コンブレーはすこし陰気だった、というのは、町のどの通りも、両側の家々がこの地方の**黒ずんだ石材**で建てられ（三三）／A l'habiter, Combray était un peu triste, comme ses rues dont les maisons construites en **pierres noirâtres** du pays…(48)

2 （コンブレーの教会）その古い**正面玄関**、…それは**黒くて**（四〇）／Son vieux **porche**…, **noir** (59)

3 **大地**がまだむきだしで**黒**かったのを（四一）／que la **terre** fût encore nue et **noire** (60)

4 （ロワゾー夫人のフクシヤの花が、紫色に腫れ、赤く充血した頬をひやしにきている教会正面玄関の）**黒ずんだ石**（四二）／la **pierre noircie** (63)

5 （夏の暑い朝、サン＝チレールの鐘塔のスレートが）まるで**黒い太陽**のように燃えあがっている（四三）／flamboyer comme un **soleil noir** (64)

6 （サン＝トーギュスタンの円屋根）　灰汁のように**黒ずんだ**、…鐘の形をしたもの（四四）／une **cloche**…, d'un **noir** décanté de cendres (66)

7（老嬢ユーラリー）彼女は**黒ラシャのマント**の上に、…小さな白いひもつき帽子をかぶっていた（四六）／Elle portait au-dessus d'une **mantle de drap noir** un petit béguin blanc…(69)

8（アドルフ叔父の部屋の版画）肉づきのいい、ばら色の女神が**黒地**に描かれていたが（四九）／représentant sur **fond noir** une déesse charnue et rose (73)

9（劇場のポスター）『**黒い仮装服**』のなめらかで神秘的なサテン（四九）／le satin lisse et mystérieux du ***Domino Noir*** (73)

10（アドルフ叔父の家で、ばら色の婦人のセリフ）ここの**階段**はひどく**暗い**でしょう（五一）／votre **escalier** est bien **noir** (76)

11（駐屯部隊の行進のあと）平日には見られない散歩者の**波**がまだコンブレーのあちこちの**通りを黒くしていた**（五九）／un **flot** inaccoutumé de promeneurs **noircissait** encore les **rues** de Combray (89)

12（雨雲。レオニー叔母のセリフ）フランソワーズ、ちょっと見てごらん、鐘塔のうしろのあの**黒い雲**を（六七）／Françoise, regardez-moi ce **nuage noir** derrière le clocher (101)

13 **14** **15**（ルグランダンが話者に語るポール・デジャルダンの詩句）**森**はすでに**黒く**、空はまだ青い（七九）／Les **bois** sont déjà **noirs,** le ciel est encore bleu (120)

16（ルグランダンの青い目）まぶたの**ふち**は**黒ずみ**、たれさがった（八三）／Le **cerne** de sa paupière **noircit,** s'abaissa (127)

17（モーヴ色のリラの花、花時も終りに近づき）いまは、くぼんだ、干からびた、かおりのうせた**あぶく**となって、そこに、小さくかたまり、**黒ずんで**、しなびていた（八九）／se flétrissait diminuée et **noircie,** une

écume creuse, sèche et sans parfum（136）

18 たった一本の**ひなげし**が、その綱具の端に赤い信号旗をかかげ、その油じみた**黒い浮標**（ブイ）の上で、それを風にはためかせているのを見ると、私の心臓は高鳴るのであった（九二）／la vue d'un seul **coquelicot** hissant au bout de son cordage et faisant cingler au vent sa flamme rouge, au-dessus de sa **bouée** graisseuse et **noire,** me faisait battre le cœur（138）

19 （話者が初めて見かけるジルベルト・スワン嬢）赤茶けたブロンドの女の子が…ばら色のそばかすがちらばった顔をあげて、私たちを見つめているのであった。彼女の**黒い目**はかがやいていた（九二）／Une fillette d'un blond roux,… nous regardait, levant son visage semé de taches roses. Ses **yeux noirs** brillaient（140）

20 （ジルベルトを思いうかべるたびに、その目の光の記憶は、彼女がブロンドだったせいで、あざやかな空色の記憶としてうかぶ）もし彼女があれほど**黒い目**をしていなかったら（九二）／si elle n'avait pas eu des **yeux** aussi **noirs**（141）

21 （ヴィヴォーヌ川）まだ**黒く**はだかのままの**土地**のあいだを、すでに空の青さに染まって流れてゆく（一〇九）／（la Vivonne）se promenait déjà en bleu ciel entre les **terres** encore **noires** et nues（167）

22 （代々のコンブレー伯爵、たとえば）サン＝チレールの後陣のステーンド・グラスに**黒漆の像の裏側**だけが見えた、あのジルベール・ド・ゲルマント（一一二）／ce Gilbert de Guermantes dont je ne voyais aux vitraux de l'abside de Saint-Hilaire que **l'envers de laque noire**（172）

23 この才能の欠如、将来に私が書くものの主題をさがし求めるときに精神のなかにうがたれるこの**真暗な穴**（一一三）／cette absence de génie, ce **trou noir** qui se creusait dans mon esprit quand je cherchais le sujet

de mes écrits futurs (173)

24 (日没後のマルタンヴィルの鐘塔) ふりかえった私に、ふたたび**鐘塔**は認められたが、こんどはもう真黒であった(一一八) /en tournant la tête je les (les **clochers** de Martinville) aperçus de nouveau, tout **noirs** cette fois (181)

25 (ヴィユヴィックの鐘塔とマルタンヴィルの二つの鐘塔が、遠ざかる馬車から一体になって見え) まだばら色の空のおもてに、もはやただ一つの**黒い**、魅力ある、あきらめの姿でしかなくなり、そして夜のなかに消える(一一八) /ne plus faire sur le ciel encore rose qu'une seule **forme noire,** charmante et résignée, et s'effacer dans la nuit (182)

26 (母と離れて先に寝にやらされる話者がはいりこむ悲しみの地帯は、あたかも夕暮れの空のなかの) みどりの帯または**黒い帯**から(一一九) /d'une bande verte ou d'une **bande noire** (183)

27 一羽の鳥がそのばら色のなかをとんでゆくのが見える、もうそのはてに達しそうだ、ほとんど**黒**にふれるばかりになり、やがてそこにはいってしまった(一一九)/On voit un oiseau voler dans le rose, il va en atteindre la fin, il touche presque au **noir,** puis il y est entré (183)

28 (ヴェルデュラン家では、常連はみな「仲間」であるし、「やりきれない連中」に似ないようにするため) **夜会服** (黒い燕尾服) を着ることは禁じてあった(一二二) /**L'habit noir** était défendu (189)

29 (スワンの恋人オデット・ド・クレシーの) 白い円形のむぎわら帽子のまえに**黒ビロードのリボン**でとめた造花のパンジーの花束(一二八) /le bouquet de fleurs de pensées artificielles fixé devant son chapeau rond de paille blanche, à **brides de velours noir** (198)

30 **31** （ヴェルデュラン家のピアニストの叔母） その女はいつものように**黒いドレス**を着ていた、というのは**黒**だといつもひきたって見えるし、また一番上品だと思いこんでいたからである、しかしその顔は、食事の直後きまってそうなるように、ひどく赤かった（一三二）／En **robe noire** comme toujours, parce qu'elle croyait qu'en **noir** on est toujours bien et que c'est ce qu'il y a de plus distingué, elle avait le visage excessivement rouge comme chaque fois qu'elle venait de manger (203—204)

32 （ヴェルデュラン家の大きな窓の金色のあかりのなか） 客の**影**が、ほそく**黒く**、スクリーンに映ったように、灯火を受けて浮きあがっている（一四六）／les **ombres** des invités se détachaient, minces et **noires,** en écran, devant les lampes (226)

33 （カトレアの花と白鳥の羽かざりを髪に挿しているオデット） 彼女はマンチラの下に**黒ビロードの波状の服**を着ていたが、その波は片前が斜にからげてあって、白の節織絹のスカートのすそを大きく三角形に見せ、おなじ白の節織絹のヨークを、デコルテの大きくあいたコルサージュに出していて、そこにもまたべつにカトレアの花が挿してあった（一五〇）／Elle était habillée, sous sa mantille, d'un **flot de velours noir** qui, par un rattrapé oblique, découvrait en un large triangle le bas d'une jupe de faille blanche et laissait voir un empiècement, également de faille blanche, à l'ouverture du corsage décolleté, où étaient enfoncées d'autres fleurs de cattleyas (232)

34 ヴィルパリジ侯爵夫人が**黒いウールのドレス**を着て、顎ひものついたボンネットをかぶって表通りを行く（一五八）／passer dans la rue la marquise de Villeparisis en **robe de laine noire,** avec un bonnet à brides (244)

35 （独創的な作家たちの場合と同じようにスワンの場合も）**腹黒い意図**をもっているように思いこませたのは、彼の用語が耳新しいからであった（一七二）／c'était la nouveauté de son langage qui faisait croire à la **noirceur de ses intentions** (266)

36 （真夜中、オデットの住居のある裏通り。金色のふかしぎな果肉をしぼりだしているような一つの窓だけを除いて）その界隈はすっかり人通りがたえ、**すべて**が**闇**につつまれていた（一七六）／**tout** était désert et **noir** dans ce quartier (272)

37 （つとめをやめたかわいい縫子が住む建物の）**暗い**、いやな匂のこもった、ふみはずしそうな**階段**（二一〇）／les **étages noirs,** malodorants et casse-cou (324)

38 （カンブルメール夫人は、イヤリングの大粒のダイヤモンドをデコルテの肩のパットにひっかけ）髪かざりの**黒ぶどうの実**を挿しなおさなくてはならなかった（二一二）／（Mme de Cambremer) était obligée de redresser les **raisins noirs** qu'elle avait dans les cheveux (328)

39 （スワン睡眠中、ある夢のたそがれのなか）またたくまに**宵闇**がひろがろうとしている（二四五）／une **nuit noire** allait s'étendre immédiatement (378)

40 （同上）突然**真暗闇**になった（二四六）／Une **nuit noire** se fit tout d'un coup (380)

41 （「一時二十二分の汽車」が話者に想像させる町の一つ）そのアクサン・テギュが**黒木**の枠で、古びたガラス戸を菱形に仕切っているヴィトレ Vitré（二五二）／Vitré dont l'accent aigu losangeait de **bois noir** le vitrage ancien (389)

42 （シャン＝ゼリゼに遊びにくるジルベルトをおもう話者の希望と不安。バルコンの石が快晴の金色に染まりだ

し、その金色の上には、手摺の鉄棒の）ぎざぎざの**影**が、…**黒く**浮きだし（二五七）／**l'ombre** découpée…se détachait en **noir** (396)

43 太陽が顔をあらわして、バルコンを被っている雪のマントの上に、金色の糸を通し、**黒い**手摺の**影**を刺繍するのであった（二五七）／sur le manteau de neige qui couvrait le balcon, le soleil apparu entrelaçait des fils d'or et brodait des **reflets noirs** (397)

44 白い雪の芝生は、除雪された小道のつくる**黒い網目**にかこまれ（二五七）／la pelouse blanche prise dans la **réseau noir** des allées dont on avait enlevé la neige (398)

45 （ジルベルトの友人たち）彼女の**友達の少女たち**が、雪の上にぽつぽつと**黒く**やってきた（二五八）／ses **amies** arrivèrent, toutes **noires** sur la neige (399)

46 （話者の母）朝早くからママに接吻するためにサロンにはいってゆくと、ママはすでに身仕度がととのい、すっかり巻きあげた**黒い髪**の塔がみごとにそびえ、白いふっくらした美しい手にはまだ石鹸が匂っていて（二六二）／entrant dès le matin au salon pour embrasser maman déjà toute prête, la tour de ses **cheveux noirs** entièrement construite et ses belles mains blanches et potelées sentant encore le savon (404)

47 （金色に染まる「アカシヤの道」の樹林。朝の光線がつくる）**黒い影**の網目（二七四）／un réseau **d'ombre noire** (424)

「花咲く乙女たちのかげに」**A l'ombre des jeunes filles en fleurs**

48 （名悲劇女優ラ・ベルマの黄金の声が朗唱するであろう詩句）いままでは印刷された本のページに単に黒と白

とで**写しだされている文字**を通じてその詩句を知っているにすぎなかったのに（二八七）／Je les (les vers) connaissais par la simple **reproduction en noir** et blanc qu'en donnent les éditions imprimées (441)

49 （ジルベルトが使ってくる書簡箋の一つ。用紙の片隅に、金文字で横書きにされたその名は）**黒く**印刷されたひらいた**雨傘**の下で（三二八）／au-dessous d'un **parapluie** ouvert imprimé **en noir** (504)

50 （「来客日」のスワン夫人（＝オデット・ド・クレシー）は）青いビロードの服をまとっていることもあったが、多くは白いレースにかざられた**黒いサテンの服**をきて（三三〇）／（Mme Swann) habillée de velours bleu, souvent dans une **robe en satin noir** couverte de dentelles blanches (507)

51 （スワンがいだく仮定）オデットのじつは潔白である**生活**を自分の嫉妬からくる**想像**だけで**くもらせていた**という仮定（三四〇）／l'hypothèse…d'après quoi c'étaient les **imaginations** de sa jalousie qui seules **noircissaient la vie,** en réalité innocente, d'Odette (523)

52 **53** **54** （ブラタン夫人がボワ・ド・ブーローニュの熱帯植物園で出あった）**黒人**（三四八）／des **noirs** (535), ces **noirs** (536), au **noir** (536)

55 （話者が初めて見る憧れの老作家ベルゴット）かたつむりの殻の形をした赤鼻と、**黒い顎ひげ**（山羊ひげ）の…男（三五五）／un homme…à nez rouge en forme de coquille de colimaçon et à **barbiche noire** (547)

56 （同上）鼻の低い、**黒ひげ**の小男（三五六）／petit homme à nez camus et à **barbiche noire** (547)

57 （同上。ゆっくりと、繊細に、鐘乳石のように、一滴一滴と、彼の著書の透明な美で丹念に私がつくっていった、あのベルゴットのすべては、無用のものとなり、残るのはその鼻と）**黒い顎ひげ**（三五六）／la **barbiche noire** (547)

58（スワン家で出されたキャヴィヤ）なんだか**黒味をおびたもの**（三五七）／une **matière noirâtre**（549）

59（褐色の肌の女ラシェル）そのきゃしゃな細面は、縮らせた**黒い髪**にとりかこまれ（三七五）／(Rachel) Sonmince et étroit visage était entouré de **cheveux noirs** et frisés（577）

60（普段着姿のスワン夫人。そのスカートは、濃い赤かオレンジかの、あのくすんだ美しい色あいの一種で、昔の裾かざりをしのばせる）幅のひろい、**黒レースのテープ**が生地を透かしながら、そのスカートに斜にかかっていた（四〇二）／la jupe…était obliquement traversée d'une **rampe** ajourée et large de **dentelle noire**（619）

61（来客日におけるスワン夫人の、白のタフタ、節織絹、青いビロード・サテン等々の美しいドレスの一つ）腕をさしだすときの一種気品に満ちた極度のつつしみ深さは、目に見えるものの姿となるために、**黒のクレープ・デ・シン**に身を装って（四〇三）／une sorte de réserve suprême et pleine de distinction dans la façon d'avancer le bras avait, pour devenir visible, revêtu **l'apparence,…du crêpe de Chine noir**（620）

62（スワン夫人の、肩口の軽いふくらみで一八三〇年型の「パフ・スリーヴ」がしのばれる）**黒サテンのドレス**（四〇四）／la **robe de satin noir**（620）

63（モーヴ色の日傘と衣裳のスワン夫人をとりかこむ男たちの）**黒**かグレーの従順な**集団**（四一三）／leur **noire** ou grise **agglomération** obéissante（636）

64（『セヴィニェ夫人の手紙』からの引用文中）**黒衣**や白衣**の修道士たち**（四二四）／des **moines** blancs et **noirs**（654）

65（コンブレーの鐘の音のような、リズミカルな汽車の振動音の一つ）**四分音符**（四二四）／une **noire**（654）

66（早朝、バルベックに向う汽車から）窓ガラスのなかの、**黒い**小さな**森**の上に（四二四）／dans le carreau

de la fenêtre, au-dessus d'un petit **bois noir** (654)

67 （嵐のくる前兆で） バルベックでは**暗く**なっているのに（四三七）／pendant qu'il faisait **noir** à Balbec (676)

68 （バルベックのグランド＝ホテルの客、爵位をもったある金持ちの老婦人の） **黒いウールのドレス**や流行おくれのボネット（四三九）／sa **robe de laine noire** et son bonnet démodé (678)

69 **夜の暗がり**のなかでは（四四一）／dans la **nuit noire** (682)

70 社会主義はヴィルパリジ夫人の**ぞっとするほどきらいな思想**だった（四五九）／socialisme…était la **bête noire** de Mme de Villeparisis (709)

71 （友人ブロックのセリフ） **暗黒の女神ケール**がぼくをひっつかんで（四八二）／que la **noire Kèr** me saisisse (745)

72 （カジノのまえで私を見つめていた、四十がらみの、非常に背の高い、かなりふとった） **真黒な口ひげ**の男（四八六）／un homme…avec des **moustaches très noires** (751)

73 （先の男―実はヴィルパリジ夫人の甥のシャルリュス男爵―は） **黒のむぎわらのカンカン帽**を目深におろし（四八六）／un **canotier de paille noire** dont il prolongea le rebord (752)

74 （ミュッセの『夜』の詩句）…行くは**ドミノの黒い服**、／いわゆるトッパーを着た女（四九七）／…Passe dans son **domino noir**／La Toppatelle (768)

75 （バルベックの未知の少女たちの） 白いたまご形の顔、**黒い目**、みどり色の目が、つぎつぎに浮かびあがってくる（五一一）／émerger un ovale blanc, des **yeux noirs**, des yeux verts (790)

76 **黒い「ポロ」帽**を目深にかぶり、笑をふくんだよく光る目と色つやのわるい厚い頬とをもった少女（五一三）／une fille aux yeux brillants, rieurs aux grosses joues mates, sous un **《polo》 noir,** enfoncé sur sa tête (793)

77 （ポロ帽を目深にかぶったこの少女は）**その目から発した黒い光**が、私とかちあった瞬間に、はたして私を見たであろうか？（五一三）／m'avait-elle vu au moment où le **rayon noir émané de ses yeux** m'avait rencontré ? (794)

78 （少女の目のなかに光っているもの、それはわれわれによく知られないもの）その本人がいだく**観念の黒い影**であり（五一四）／ce sont…les **noires ombres des idées** que cet être se fait (794)

79 （夕映えのバルベック。岸に近い海上には、めのうのようなかたさで、いかにも重そうな）**煤のように黒い**、しかし、つやのある靄が（五二〇）／des **vapeurs d'un noir de suie** mais aussi d'un poli (803)

80 （月のようにまるい赤い太陽のそばに、黄色い雲が湖の形にひろがり、その湖面に）**黒い剣**がいくつかその岸の木々のように姿を映していた（五二〇）／des **glaives noirs** se profilaient ainsi que les arbres de sa rive (805)

81 （夜のホテルの食堂、このガラス張りの巣箱の光る外壁に）貧乏人や物見高い人の**群れ**が、…さむい風でかじかんだ**黒い房**のようにすがりつくのであった（五二一）／**l'essaim** des pauvres et des curieux…pendait, en **noires grappes** morfondues par la bise,…(806)

82 （リヴベルのレストランの、珍しい鳥類を思わせる給仕人）**黒い**みごとな**髪**の冠毛をつけて（五二三）／emplumé de superbes **cheveux noirs** (810)

83（一台の馬車が通る余裕しかない）**真暗な闇**の道（五二六）／ces sentiers…où il faisait **nuit noire**（814）

84（ホーガス作の肖像画『ジェフリーズ』。赤ら顔に）かみタバコをかんだ**黒い鉤形のしみ**跡（五三五）／le **croc noir d'un reste** de chique（829）

85（小さな一団の、あの笑をふくむ目をもった、青白い、高慢な少女）**黒のポロ帽**の下に（五三五）／sous **un polo noir**（829）

86（話者がすれちがった、顔色がばら色の少女も）やはり**黒のポロ帽**をよぶっているが（五三五）／(la jeune fille) avait aussi **un polo noir**（829）

87（海の光景）ある個所では、嵐のなごりで**黒い**が（五四一）／**ce** qui était, ici **noir** dans un effet d' orage（837）

88（例の小さな一団のなかの自転車をおしていた少女。話者は画家のエルスチールから、アルベルチーヌ・シモネという名であることを知る）その**黒い髪**の上に、ふくらんだ頬のあたりまでひきさげた例のポロをかぶり（五四四）／avec, sur **ses cheveux noirs,** son polo abaissé vers ses grosses joues（844）

89（エルスチール夫人）その**黒い髪**も、もう白くなりかけていた（五四八）／ses **cheveux noirs** blanchissaient（850）

90（現像・焼付に不可欠な、孤独な内部の暗室。エルスチールによってアルベルチーヌに紹介された話者は、あとでホテルに帰って、ひとりになり、ふたたび元の自我に立ちかえったとき、はじめて快楽をおぼえる）快楽はその点、写真とおなじだ。愛人のまえでとるものは、写真の陰画でしかなく、それを現像するのは、もっとあと、ひとたび自分の部屋にこもってからであり、みんなといっしょにいるあいだは出入り「禁止」になっている

あのわれわれの**内部の**暗室を、われわれが自由に使えるようになってからである（五六三）／Il en est des plaisirs comme des photographies. Ce qu'on prend en présence de l'être aimé n'est qu'un cliché négatif, on le développe plus tard, une fois chez soi, quand on a retrouvé à sa disposition cette **chambre noire intérieure** dont l'entrée est《condamnée》tant qu'on voit du monde (872)

91 （タキシードの作法を心得ず、ミュージック＝ホールなどに現われ、ゴルフ選手でバカラのあそび手のオクターヴを困らせるヴェルデュラン氏）村の公証人のような**黒服に黒ネクタイの紳士**（五七〇）／un **monsieur en veston et en cravate noire** de notaire de village (883)

92 むっとした顔をしてくるりと横を向けたそのアルベルチーヌの頭の上に、うしろ髪がほかのところとちがって、ひときわ**黒く**、まるでさっと水から出てきたように、光っていた。私はぬれた牝鶏を連想したのであった。そしてその髪は、かすかにむらさきをおびたばら色の顔と神秘な光を放つまなざしとがこれまで宿らせているように見えた魂とはべつの魂をアルベルチーヌのなかに宿らせているように見えたのであった（五七四）／Sur sa tête inclinée d'un air boudeur, ses **cheveux** qu'elle avait derrière différents et plus **noirs** encore, luisaient comme si elle venait de sortir de l'eau. J'avais pensé à une poule mouillée, et ces cheveux m'avaient fait incarner en Albertine une autre âme que jusque-là, la figure violette et le regard mystérieux (890)

93 （エルスチールの語るヨット競技会に集まる着飾った女たち。さくらんぼ色のブロケードやみどりのダマスを身につけた女たち、一方、）真珠をぬいちりばめ、ヴェネチア・レースをかざった**黒のパフ・スリーヴ**に白の裏地が透いて見えるスラッシ入りの**ドレス**を着た他の女たち（五八〇）／d'autres femmes se penchaient pour regarder, dans leurs **robes aux manches noires** à crevés blancs serrés de perles ou ornés de guipures

(898)

94 (話者が思いだす、『千一夜』を描いたプチ・フール用の皿、その皿とそれのかざり模様は、あの灰色の、シャンパーニュ地方らしいコンブレーのなかに、さまざまの色彩ではめこまれていた) あたかも**暗い教会**のなかの、ちかちか光る宝石のはいったステーンド・グラスのように(五八三) /comme dans la **noire Église** les vitraux aux mouvantes pierreries (904)

95 (話者がオクターヴやアンドレといるところへ、散歩のアルベルチーヌがやってきた) 彼女の**黒い髪の毛**の下には、垂直の額が、私の抱いていた不確実な映像と対立した、…その一方で、その額の白さが私の目に強く食いこむのであり(六〇〇) /sous ses **cheveux noirs,** la verticalité de son front s'opposa…à l'image indécise que j'en avais gardée, tandis que par sa blancheur il mordait fortement dans mes regards (930)

96 (グランド=ホテルのアルベルチーヌがとっておいた部屋で、私は初めて彼女に接吻をしようとする。窓の外の谷間が月光に照らされている。彼女の顔、頬は、充血していっそうばら色に見え、) 軽くカールした**黒い長い組毛**の一つが、その頬を、上から下に横ぎっていた。私をよろこばせるためにその組尾を全部ほどいていた(六〇二) /sa jone était traversée de haut en bas par une de ses **longues tresses noires** et bouclées que pour me plaire elle avait défaites entièrement (933)

97 (アルベルチーヌや話者の女友達アンドレ。彼女のまえでは、話者は、夜、闇のなかに咲く白椿(カメリヤ)をながめるような快感をおぼえる) アンドレのまえでは——これはその白い頬が、その**髪の黒さ**できりっと目立っていた(六一〇) /devant Andrée—dont les joues blanches recevaient tant d'austère distinction de ses **cheveux noirs** (945)

98 （アルベルチーヌ。エナメルのような、そのつやつやしたばら色の頬に、）彼女の**黒い髪の毛**がこころもちほどけながらかさなりあって被いかぶさり（六一〇）／le couvercle entr'ouvert et superposé de ses **cheveux noirs**（947）

99 （熱っぽくて、肉感的な顔色をしているときのアルベルチーヌ。彼女の頬の色あいは）ある種のばらのくすんだ紫紅色、ほとんど**黒に近い臙脂**になることがあった（六一一）／la sombre pourpre de certaines roses d'un **rouge presque noir**（947）

（1）『文学と色彩―プルーストと「mauve」―』、『プルーストと「青」のイマージュ』、「教養論叢」第25号、第26号、一九六九年、慶應義塾大学法学研究会。

（2）Allan H. Pasco, *The Color-keys to《A la recherche du temps perdu》*, Droz, 1976.

（3）François Davy, *L'Or de Proust*, La pensée universelle, 1978.

（4）Cf. *Baudelaire Les Fleurs du mal, Concordances Index et Relevés Statistiques*, Larousse, 1965.

（5）Pasco, *op. cit.*, p. p. 178-190.

（6）塚田敢『色彩の美学』、紀伊国屋書店、一九七八年、二三、一三七、一三八ページ。

（7）赤池鉄士『英語色彩の文化誌』。研究社出版、一九八一年、一九〇ページ。

（8）*Dictionnaire des symboles*, Robert Laffont, 1969, p. 538.

（9）*Correspondance de Marcel Proust* 1905（Tome V), texte établi, présenté et annoté par Philip Kolb, Plon, 1980, p. 345.

（10）Marcel Proust, *A la recherche du temps perdu*, Pléiade, Gallimard, 3 vol., 1954. tome I. 邦訳は、筑摩世界文学大系57「プルースト　I」井上究一郎訳、筑摩書房、一九七三年を使用させていただいた。引用中、カッコ内の数字は上記二書のページ数を示している。

（1983. 5）